鎌倉幕府御家人

千葉常胤と上総広常

千葉常胤肖像　　　　　　　上総介廣常肖像

源頼朝が武家中心の政治を開いた鎌倉幕府の中で、房総出身の有力御家人の千葉胤常と上総広常は、五代前の先祖平忠常の子息として育った武将です。

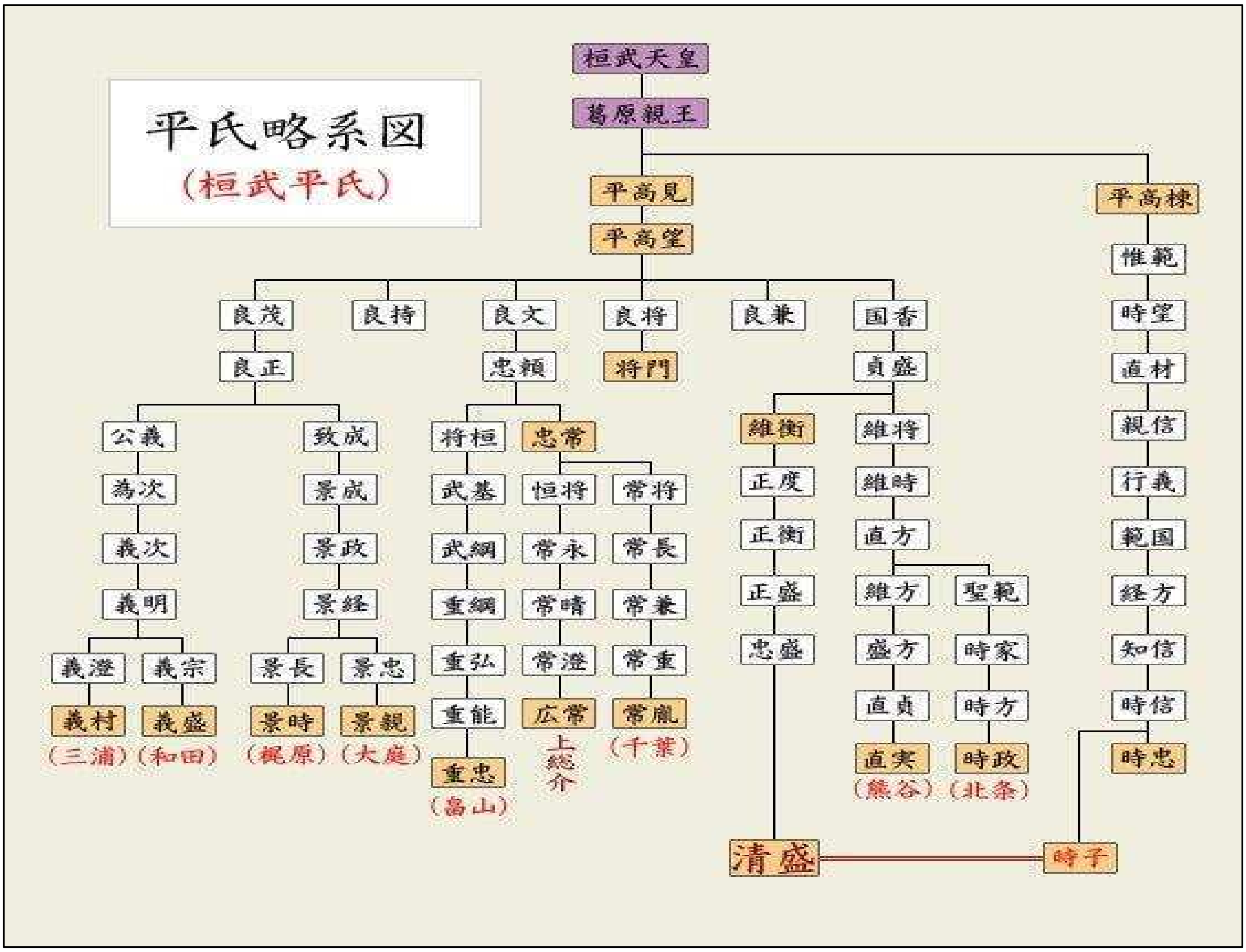
上総国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会　会員）

令和４年　１０月　編集・製作

房総　千葉一族の盛衰

中世の房総半島を中心に栄えた千葉氏は、平安京をつくった桓武天皇の血を引く関東の大豪族です。
桓武天皇の第５皇子・葛原親王の孫に当たる高望王が、寛平元年（８８９年）に「平朝臣」の姓を与えられて臣籍降下し、桓武平氏の祖となり、その後も上総介となった高望の子達は常陸国や下総国で栄えた。
鎮守府将軍になった平国香や下総介平良兼、そして平良将（平将門の父）等の名前が知られているが、千葉氏の祖となる平良文も、高望の子として父の遺領の一つである相模国村岡（現藤沢市村岡）に住み「村岡五郎良文」と名乗っていた。
良文の甥にあたる平将門が乱を起こした時には、将門と戦った国香が殺害され、良兼も病死している。そして乱を起こした将門も藤原秀郷や平貞盛（国香の嫡子）との戦いで戦死した。
良文は将門に味方して戦いに加わったが、あまり争いに加わらなかった為、関東における良文の領地は没収されることなく残り、やがてその子孫は繁栄して、後の時代の千葉氏や上総氏などを生むこととなる。
良文系の一族である千葉氏は、平安時代末期に下総介常重が、上総国大椎から下総国千葉庄（現在の千葉市）へ移り、その地名を苗字とする武士団として千葉庄等を中心に勢力を保った豪族です。その後常胤の代に、石橋山の戦いで平家に敗れ房総に逃れて来た源頼朝を同族の上総介広常と共に挙兵し、一貫して協力したことから、頼朝から師父と呼ばれるほどの深い信頼を得た。そのこともあって鎌倉幕府成立後は、東北から鹿児島に至るまでの全国各地に領地を与えられたという。
その後、上総介広常は謀反の疑いで頼朝に殺されるが、千葉常胤への信頼は揺るがず、千葉氏は房総平氏の代表的存在となり、各地に数多くの地頭職を持つなど大大名へと変貌し、同時に下総国守護に任ぜられ、以後も千葉氏の嫡流が千葉介を称して守護を世襲していった。



千葉常胤について

千葉常胤は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての武将で、千葉氏を豪族から鎌倉幕府の御家人の地位まで登らしめた千葉家中興の祖と言われる。常胤以降、一族は諱に「胤」の一文字を受け継ぐことが多くなる。
在地領主＝武士の政権・鎌倉幕府の創設に努力し、それによって子孫発展の基礎を築いた。
千葉常胤の父は、「千葉権介の千葉常重」・母は「石毛政幹の娘」で、上総介広常とは又従兄弟となる。
常胤の誕生日は、元永元年５月２４日（１１１８年6月１４日）で、死没は建仁元年３月２４日（１２０１年4月２８日）で享年８４歳と言われる。
官位は上総権介、下総権介を賜っている。
常胤は、保元の乱（１１５６年）に出陣し、源義朝指揮下で戦い、これにより少なくともこの時点では常胤を義朝の郎党とする見方もあるが、保元の乱での後白河天皇側の武士の動員は官符によって国衙を通じた公式動員である。
その後、平治の乱で源義朝が敗死すると、永暦２年（１１６１年）には常陸国の佐竹義宗（隆義の弟）が前下総守・藤原親通から常重の証文を手に入れ、藤原親盛とも結んで伊勢神宮に再寄進し、これも伊勢神宮に認められた支配権を得る。
これを知った常胤も翌月に再度伊勢神宮に寄進の意向を示した。この為、伊勢神宮側では常胤側の窓口となった禰宜の荒木田明盛と義宗側の窓口となった禰宜・度会彦章の対立が生じた。その後義宗が伊勢神宮に供祭料を負担して寄進状の約束を果たしたことが評価され、長寛元年（１１６３年）に義宗の寄進を是とする宣旨が出され、続いて永万２年（１１６６年）６月１８日に明盛から彦章に契状を提出し、仁安２年（１１６７年）６月１４日付けで和与状が作成された。当時、和与による権利移転は悔返を認めない法理があり、これによって度会彦章・佐竹義宗の勝訴が確定した。
以後、常胤は義宗と激しく争うことになる。
この頃、平治の乱で敗れた源義朝の大叔父に当たる源義隆の生後間もない子が配流されてきたため、常胤は流人としてこれを監督しつつも、源氏への旧恩から、この子を密かに源氏の子として育てた。この子が後の源頼隆です。

頼朝の挙兵

治承４年（１１８０年）、伊豆国で挙兵した源頼朝が「石橋山の戦い」に敗れた後に安房国へ逃れると、頼朝は直ちに常胤に加勢を求める使者として安達盛長を送った。「吾妻鏡」によれば、治承４年９月９日に常胤は胤正・胤頼以下の息子達と使者の安達盛長を丁寧に迎え入れて、言伝えを聞いたが何も反応を示さなかった。そこで胤正と胤頼が早急の返事をするように進めたところ、「自分の心中はもちろんそのつもりだ。ただ、頼朝殿が源氏中絶の後を興されたことを考え

ると、感涙が眼を遮り、言葉も出ないのだ」と言って、盛長に相模国鎌倉を根拠にすることを勧めたとされている。
一方、「源平盛衰記」では、常胤が「一旦上総介と相談をしたい」述べた為、盛長が館を出たところ、隅々鷹狩から戻る途中の胤正に出会い、胤正は盛長を館に連れ戻した後に常胤に「上総介の家臣ではないのだから、相談する必要は無い」と述べ、常胤も参陣の意を述べたとされている。
９月１３日、常胤は胤頼の勧めに従って、常胤と嫡孫・成胤（胤正の子）に命じて平家に近いとされた下総の目代を下総国府に襲撃してこれを討っている。ところが、匝瑳郡に根拠を置き、平家政権によって下総守に任じられていた判官代の藤原親政が頼朝討伐に向かう途中でこの知らせを聞いて急遽千葉荘を攻撃した。
９月１４日に急遽引き返した成胤と親政は戦いに及んで、親政を捕縛することに成功した。

頼朝軍に参陣

吾妻鏡では、９月１７日に常胤は一族３００騎を率いて下総国府に赴き、頼朝に参陣したとされているが、頼朝が途中、常胤の本拠である千葉荘を通過して千葉妙見宮などを参詣したと伝えられていることから、現在では最初の会見場所は上総国府（現在の市原市）もしくは結城ノ浦（現在の千葉市寒川神社付近）で行われたと思われる。なお、その時に源氏の子として育ててきた頼隆を伴って参陣させたとされ、頼朝から源氏軍への参陣への労いの言葉を受けるとともに、頼隆を頼朝に対面させて源氏の孤児を育ててきたことを深く感謝され、「司馬を以って父となす」と述べられたと言われている。もっとも、前述の経緯のように常胤の参陣の背景には、国府や親平氏派の下総藤原氏や佐竹氏との対立関係や、かつての相馬御厨を巡る千葉常胤と源義朝との間のいきさつを考慮しなければならず、頼朝の決起に感涙したという「吾妻鏡」のような美談をそのまま事実とすることは出来ない。
頼朝軍は１０月２日には太日川の隅田川を越えて武蔵国に入り、豊島清元・葛西清重父子に迎えられているが、この際に船を用意したのは千葉常胤と上総介広常と言われている。また、豊島清元は治承元年（１１７７年）の香取神宮造営の際の雑掌を勤めており、、この時在庁官人であった千葉常胤とも造営を通じて関係を持ち、畠山氏などの平家方勢力が残る中での源頼朝の美佐氏入国に際しては両岸の千葉・豊島両氏が連携を行ったとみられる。
千葉常胤は、頼朝軍の与力として活躍し、富士川の戦い後に上洛を焦る頼朝を宥めたと言われている。
その後佐竹氏討伐を進言して相馬御厨の支配を奪還する。寿永２年（１１８３年）に頼朝に疎まれた上総介広常が抹殺され、房総平氏の惣領の地位は千葉常胤に移ることになる。もっとも、広常の抹殺は頼朝の身内的存在であった北条氏・比企氏の台頭と並行して行われ、抹殺の結果として頼朝を支える基盤が常胤を含む房総平氏から北条氏・比企氏に移り、頼朝の「義父」としての立場を失った常胤は鎌倉政権中枢から御家人の一人に転落することになった東夷見方もできる。
元暦元年（１１８４年）には、源範頼軍に属して一の谷の戦いに参加、その後は豊後国（大分県）に渡り軍功を挙げた。文治３年（１１８７年）洛中警護のため上洛。
文治５年（１１９０年）の奥州藤原氏討伐のための奥州合戦に従軍し、東海道方面の大将に任ぜられ活躍し欧州各地に所領を得た。

建久４年（１１９３年）には香取神社造営雑掌を務め、後に千葉氏が香取神社地頭として、社内への検断権を行使する権利を獲得するきっかけとなった。

千葉常胤は、建仁元年（１２０１年）３月２４日に死去した。享年８４歳で死去したが、どこの地で死去したのかは不明で、千葉市轟町の大日寺に十数基の五輪塔が建っており、この中に常胤の物があると言われている。

常胤の子孫たち

常胤には、６人の子供がおりそれぞれに広大な領地を与えている。この６人の系統を合わせて「千葉六党」と言い、北下総一帯に勢力を展開して千葉宗家の領国支配の一端を担った。

千葉氏は、鎌倉・室町時代を通じて下総国守護として大きな勢力を持ち続けたが、鎌倉公方と京都の将軍家の対立の中で、千葉宗家にも内紛が起こり、馬加康胤・原胤房が宗家の千葉介胤直・胤宣父子を滅ぼし、常胤以来の千葉氏嫡流は滅亡した。更に、馬加康胤も争いを収めるために京都から派遣された東常緑に討たれ結局、千葉氏胤の血を引くと言われる岩橋輔胤がその後の千葉氏の家督を継承することとなった。

輔胤の子の孝胤は、千葉氏の本拠地を千葉から佐倉に移す為に「本佐倉城」を築いたと言われる。

鎌倉幕府御家人上総広常（平廣常）

上総介廣常について

上総広常は、平安時代末期の武将で豪族の上総権介平常澄の八男（嫡男）、上総介広常（上總介廣常とも書く）の呼称が広く用いられるが、上総介は官位であるので本名は平広常と言います。
房総平氏惣領家頭首であり、源頼朝の挙兵に呼応して平家との戦いに臨んだ武将です。

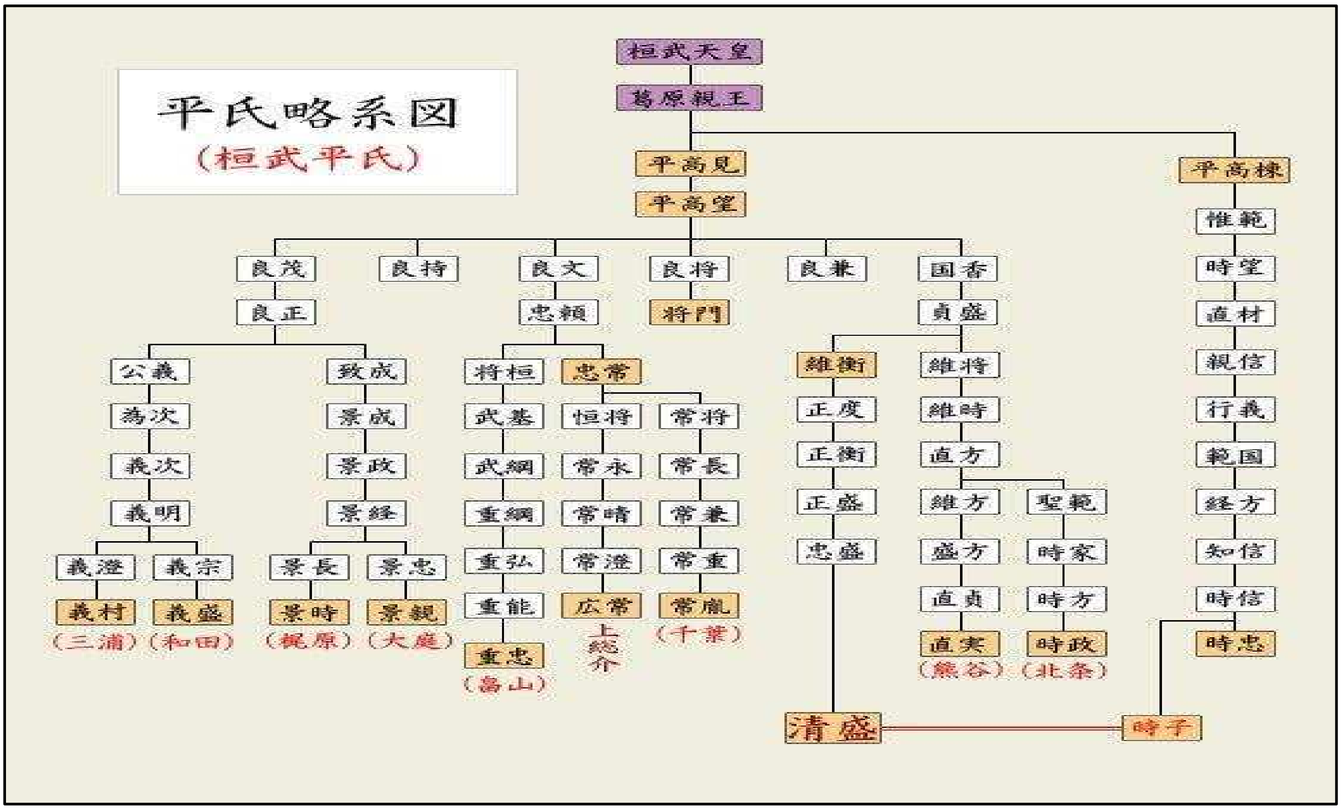
生誕は、不明
没年は、寿永２年１２月２０日
（１１８４年2月３日）

別名　介八郎・平広常・弘常
墓所　横浜市金沢区朝比奈町の五輪塔
官位　上総権介
氏族　桓武平氏良文流・房総平氏・上総氏
父・母　父　平（上總）常澄　　母　不明

上総廣常の生涯

生年は不明ですが、通称は「介八郎」ということから八男だったと思われる。
父の常澄は、資料によれば「前権介」と言われるが、諸系図によると「上総介」と思われる。
１２世紀末、上総国の公領･荘園は上総氏がそのほとんどを所領化しており、広常はかかる一族の家督、総領として、かつ上総国衙最有力在庁の「権介」として、ほぼ一国規模で封建軍事体制を確立しつつあったと思われる。

上総介廣常の家系図（千葉常胤と又従兄弟であることが分る）



平治の乱と家督争い

広常は、鎌倉を本拠とする源頼朝の郎党であった。
保元元年（１１５６年）の保元の乱では源義朝に属し、平治元年（１１５９年）の平治の乱では義朝の長男の源義平に従い活躍、義平十七騎の一騎に数えられた。
平治の乱の敗戦後、平家の探索をくぐって戦線離脱し、所領の上総に戻ったという。
義朝が敗れた後は平家に従ったが、父・常澄が亡くなると、嫡男である広常と庶兄の常影との間で上総氏の家督を争う内紛が起こり、兄弟間の抗争は後の頼朝挙兵まで続いたと言われる。
治承３年（１１７９年）１１月に、平家の有力家人・伊藤忠清が上総介に任ぜられると、広常は忠清と対立し、平清盛に勘当された。
源頼朝の挙兵時の広常と千葉常胤の参陣・挙兵は、行き詰まった在地状況を打開するための主体的な行動であり、平家との関係を断ち切ることにより実力によって、両総平氏の族長としての地位を確立した。

源頼朝挙兵

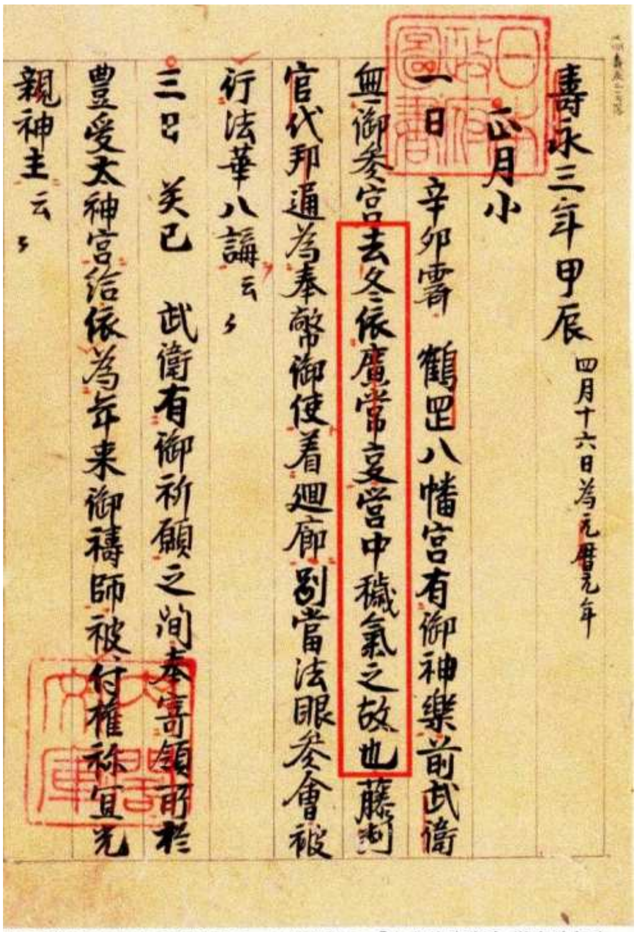
治承４年（１１８０年）８月に打倒平氏の兵を挙げ、９月に石橋山の戦いに敗れた源頼朝が、安房国で再挙を図る為上総介や千葉常胤を初め豪族に支援を求めて使者を向け、千葉氏一族は素早く支援の兵を出し頼朝を迎え入れたが、広常は参陣が遅れ隅田川辺に陣地を構えていた頼朝のもとに２万騎（別節では１万騎とか１千騎とも言われる。）
率いて参上した。しかし頼朝は、大軍を率いて来た広常を喜ぶどかろか、逆に遅れて来たことをとがめたという。
広常はその頼朝の器量を感じて和順したと言われる。しかし、「吾妻鏡」に記されている広常に関する記述を詳細に分析すると、広常は当初から頼朝を支援する為に参陣したという説（野口実氏）もある。それは、頼朝挙兵以前に頼朝からの使者に対する広常の返答は早速の了承であり、ただ船の都合で８月下旬までの参向は無理だったと思われる。

このことから９月１９日の隅田川辺での頼朝軍への参向は、広常による平家方勢力の掃討を意味するものと意味したものです。
そして、頼朝への参向は上総及び上総国府と考えるのが妥当と思われる。

呉座勇一も広常が初めから頼朝側であったからこそ、頼朝が安房に上陸し上総国を経由して千葉氏が下総に向かえたとし、広常が率いたという大軍も上総国内から平家勢力を一掃したことによって動員が可能になったと思われる。
治承４年（１１８０年）１１月の富士川の戦い（平維盛を大将とする源頼朝追討軍に従事していた兄印東常茂が広常に討ち果たされた。これにより、房総平氏は広常の許で統一されることとなった）の勝利後、上洛しようとする頼朝に対して、広常は常陸源氏の佐竹氏討伐を主張した。
広常はその佐竹氏とも姻戚関係があり、佐竹義政・秀義兄弟に会見を申し入れたが、秀義は「すぐには参上出来ない」と言って金砂城に引きこもってしまった。兄の義政はやって来たが、互いに家人を退けて二人だけで話そうと橋の上に義政を呼び、そこで広常は義政を切り殺した。その後、頼朝軍は金砂城の秀義を攻め、これを敗走させた。（金砂城の戦い）

広常抹殺

寿永元年（１１８２年）になると、広常と頼朝との対立が激しくなったとされているが、対立が激しかったのは寿永元年以前であり、寿永元年になると両者の関係は改善されたとする指摘がある。
広常抹殺の原因は、頼朝に宣旨が下って東国行政権が国家的承認されるに及び、元来頼朝にとっての最大の武力基盤であった広常がかえってその権力確率の妨害者となっていたことが抹殺に繋がったという説がある。頼朝政権内部では、東国独立論を主張する広常ら有力関東武士層と、頼朝を中心とする朝廷との協調路線派との矛盾が潜在しており、前者は以仁王の令旨を東国国家のよりどころとしようとし、後者は朝廷との連携あるいは朝廷傘下に入ることで東国政権の形成を図る立場であった。
寿永２年１０月宣旨により頼朝政権は対朝廷協調路線の度合いを強め、宣旨直後に東国独立論を強く主張していた広常が暗殺されたことは、頼朝政権の路線確定を表すものと考えられる。
また、広常は以仁王の令旨と共に彼の遺児である北陸宮を擁しようした点では「反中央」「反朝廷」ではなかったが、北陸宮を擁する木曽義仲との接近が頼朝に警戒され、頼朝と義仲の関係が破綻するとともに「親義仲」とみなされた広常が抹殺された原因とする説もある。
寿永２年（１１８３年）１２月、謀反の企てがあるとの噂から頼朝に疑われた広常は、頼朝の命を受けた侍所所司の梶原景時に鎌倉の御所内で暗殺された。景時と双六に興じていた最中に、景時は突然盤を飛び越えて広常の首を掻い切ったとされる。
その後、嫡男上総能常も討たれ、上総氏は所領を没収され千葉氏や三浦氏などに分配された。


壽永三年甲辰 四月十六日為元暦元年
正月小
一日 辛卯 霽 鶴岡八幡宮有御神楽 前武衛
無御参宮 去冬依廣常事宮中穢氣之故也 藤判
官代邦通為奉幣御使着廻廊 別當法眼參會 被
行法華八講云々
三日 癸巳 武衛有御祈願之間 奉寄領所於
豊受太神宮給 依為年来御祷師 被付権祢宜光
親神主云々

『吾妻鏡』寿永3年正月1日条。赤枠部分に「去冬依廣常事 宮中穢気之

しかし、寿永３年正月に、頼朝は生前の広常が甲一領（甲冑）を上総国一宮の玉前神社に奉納していたとお報告を受けたので、その甲冑を鎌倉に取り寄せて調べたところ、紐で結び付けられた願書が見つかった。そこには「前兵衛佐殿下　心中祈願成就　東国泰平」と記されており、そこには謀反を思わせる

文章などは無く、頼朝の武運を祈る文章があったと言われ、頼朝は広常を殺した事を後悔し、即座に広常の又従兄弟の千葉常胤預かりとなっていた一族を赦免したとされる。
もっとも、願文発見の逸話も広常の粗暴な振舞いの逸話と同様鎌倉時代後期編纂の「吾妻鏡」にしか見られず、信ぴょう性は不明です。
広常死後、千葉氏が房総平氏の当主を継承したと言われる。

上総介広常の館跡

広常の館跡の正確な位置は今もって不明ですが、１９９０年代に千葉県夷隅郡大原町（現いすみ市）や御宿町一帯と思われ、中世城館跡の調査が行われ、検討されている。
千葉県東金市松之郷の字「新山」と字「城坂」に至る舌状台地に「新山城」址があり、広常館があったと伝えられている。
また、「房総志料」では、布施村（現いすみ市下布施・上布施、御宿町上布施）に館があったという説もある。村内には、山を背にした「殿台」と呼ばれる平坦な土地があり、ここが広常の館跡であるという。
その他にも「千葉大系図」では、一宮柳沢城に広常の館があったとしている。一宮町では、これを町内の高藤山城の事だとしており、城内に一宮藩主・加納久微が広常の功績をたたえて作った石碑がある。
一方、柳沢を一宮に近い「大柳」の誤記ととらえ、睦沢町の大柳館のことだと考える向きもある。
なお、鎌倉における広常の屋敷跡は、朝比奈の切り通し沿いにあり、近隣には大大刀洗の水や上総介などの関連史跡がある。

上総広常の史跡

上総一宮の玉前神社　社殿

鎌倉に建つ上総介塔

梶原景時が太刀を洗ったという湧き水

広常を弔う布施塚

参考資料

上総　広常の妻（正室・側室）と子と子孫たち

上総広常（上總介広常）は、「吾妻鏡」よると、佐竹氏の「縁者」であるが、広常の妻が佐竹氏の縁者あったと思われる。当時、佐竹氏と姻戚関係のあった奥州藤原氏につながる女性が妻であったと言われています。（佐竹太郎冠者義政の母は、奥州藤原氏初代・藤原清衡の娘です。）

上総広常に側室がいたかは不明ですが、その子供は分かっている限りでは一男二女であり、正室のみが生んだとしてもおかしくないと思われる。

上総広常の嫡男：上総能常

広常の嫡男は上総能常（かずさよしつね）で、名前の表記は「良常」とも書く。「小権介」と称された。

父広常の後継者として、平家家人の伊藤右衛門忠清（藤原忠清）によって父が讒言（ざんげん）された際には、京に上って弁明したこともあると言われる。とは言っても最終的には広常が呼び寄せられ、彼の実務能力はいかほどだったかは計り知れません。

上総広常の娘（長女）：小笠原長清室

広常の長女は、治承５年（１１８１年）２月１日に、頼朝の媒酌により甲斐国の加賀美次郎（小次郎）こと小笠原長清の妻となっている。

夫の小笠原長清は、甲斐源氏の加賀美信光の息子で、鎌倉幕府の重臣にして「鎌倉幕府御家人１３人」の一人である和田義盛の姉妹を母としています。

小笠原長清室は、父広常没後の文治２年（１１８６年）に父の名誉回復後、上総国佐是郷矢田村や池和田村を所領としていたことが分っています。

長女の所生の子が何人いたかは不明ですが、一説には、長清の七男の大井朝光は長女の所生と言われる。

大井朝光の子孫は、信濃守護代の大井氏で、戦国時代までその名は続いている。

上総広常に娘（次女）：平時家室

広常の次女は、父広常が存命時に、平清盛の義理の甥（平　清盛正室時子の弟・平時忠の息子）に当たる平時家に嫁いでいる。広常は、平時家をかなり気に入ってしまい、最終的に娘婿にまでしている。

平時家室が何人子を産んだかは不明ですが、娘一人は、頼朝の孫娘竹御所に仕えた後、大江広元の嫡男の大江親弘の側室となって大江広時を生んでいる。広時は寒河江氏の祖となった。

上総広常の娘？（姉妹？）：良岑高成（よしみねたかなり）（原高成）室

「武功夜話」によると。広常には尾張国丹羽郡郡司であった良岑高成に嫁いだ娘がいたと言われる。

ただ良岑高成の生年は不詳で、高成の娘が平清盛の父・忠盛の側室となって清盛の異母弟である薩摩守平忠度を生んだと言われ、少なくても源平合戦時にはかなり高齢だったと思われる。そうなると広常の娘ではなく、姉妹を養女にして良岑高成に嫁がせたとも思われる。

この資料作成に当たり、「ウィキペディア」上総広常及び千葉常胤・吾妻鏡・鎌倉手帳・鎌倉タイム・その他インターネットより資料を抽出し作成しました。

編集・製作　上総の国いちはらの歴史を知る会

連絡先　０９０－３５４５－１１１３